

世界

- 1 世界は成立していることがらの総体である。
- 1.1 世界は事実の総体であり、ものの総体ではない。
- 1.13 論理空間の中にある諸事実、それが世界である。
- 1.2 世界は諸事実へと分解される。
- 2 成立していることがら、すなわち事実とは、諸事態の成立である。
- 2.02 事態とは諸対象（もの）の結合である。(Sachen Dingen=もの？事物？)
- 2.0124 すべての対象が与えられるとき、同時にすべての可能な事態も与えられる。
- 2.0231 世界の実体が規定しうるのは、ただ形式のみであり、実質的な世界のあり方ではない。なぜなら、世界のあり方は命題によってはじめて描写されるのであり、すなわち、諸対象の配列によってはじめて構成されるからである。
- 2.0232 ひとことで言うならば、対象は無色なのである。
- 2.025 実体は形式と内容からなる。
- 2.0251 空間、時間、そして色（何らかの色をもつということ）は対象の形式である。
- 2.026 対象が存在する時にのみ、世界の不変の形式が存在しうる。
- 2.0271 対象とは不変なもの、存在し続けるものである。対象の配列が変化するもの、移ろうものである。
- 2.072 対象の配列が事態を構成する。
- 2.032 諸対象が事態において結合する仕方が事態の構造である。
- 2.033 構造の可能性が形式である。
- 2.034 事実の構造は諸事態の構造からなる。
- 2.04 成立している事態の総体が世界である。
- 2.06 諸事態の成立・不成立が現実である。
- 2.061 事態は互いに独立である。

像

- 2.1 われわれは事実の像を作る。
- 2.11 像は論理空間において、状況を、すなわち諸事態の成立・不成立を表す。
- 2.12 像は現実に対する模型である。
- 2.13 像の要素は像において対象に対応する。
- 2.15 像の要素が互いに特定の仕方に関係していることは、ものが互いに関係していることを表す。像の要素のこのような結合を構造と呼び、構造の可能性を像の写像形式と呼ぶ。
- 2.1511 像はこのようにして現実と結びついている。像は現実に到達する。
- 2.17 像が像という仕方現実を一正誤はともかくとして一写しとっているために現実と共有していなければならぬもの、それは写像形式である。
- 2.182 すべての像は論理像でもある。
- 2.2 像は写像されるものと写像の論理形式を共有する。
- 2.202 像は論理空間における可能的状況を描写する。

2.21 像は現実と一致するかしないかである。すなわち、正しいか誤りかであり、真か偽かである。

2.221 像が描写するもの、それが像の意味 Sinn である。

2.222 像の真偽とは、像の意味 Sinn と現実との一致・不一致である。

2.225 アプリオリに真である像は存在しない。

思考

- 3 事実の論理像が思考である。
- 3.001 「ある事態が思考可能である」とは、われわれがその事態の像を作りうるということにほかならない。
- 3.01 真なる思考の総体が世界の像である。
- 3.02 思考は、思考される状況が可能であることを含んでいる。思考しうることはまた可能なことでもある。

命題

- 3.1 思考は命題において知覚可能な形で表される。
- 3.12 われわれが思考を表現するのに用いている記号を、私は命題記号と呼ぶ。そして命題とは、世界と射影関係にある命題記号である。
- 3.13 命題には射影に属するすべてのことが属するが射影されるものは属さない。つまり、命題に属するのは、射影されるものの可能性であり、射影されるものそれ自身ではない。それゆえ、命題にはそれが意味 Sinn する事実までは含まれない。他方、その事実を表現する可能性は含まれている。
- 3.202 命題において用いられた単純記号は名と呼ばれる。
- 3.203 名は対象を指示する。対象が名の意味 Bedeutung である。
- 3.21 命題記号における単純記号の配列に、状況における対象の配列が対応する。
- 3.221 対象に対して私は名を与えることができるだけである。そうして記号は対象の代わりをする。私は対象について語ることはできるが、対象を言い表すことはできない。命題はただものがいかにあるかを語りうるのみであり、それが何であるかを語ることはできない。
- 3.25 命題の完全な分析が1つ、そしてただ1つ存在する。
- 3.26 定義を用いて名をさらに分解することはできない。名は原始記号である。
- 3.3 命題のみが意味内容 Sinn をもつ。名は、ただ命題という脈絡の中でのみ、指示対象 Bedeutung をもつ。
- 3.3441 たとえば、真理関数の表記法すべてに共通なものは、次のように言い表せる。一どの真理関数の表記も、たとえば、「 $\sim p$ 」（「 p ではない」）と「 $p \vee q$ 」（「 p または q 」）という表記法を用いて書き換えることができる。それはすべての真理関数の表記法に共通なことである。
- 3.4 命題は論理空間の中に1つの領域を規定する。この論理的領域は、もっぱらその領域の構成要素の存在、すなわち有意味な命題が存在することによって、保証されている。
- 3.42 命題は論理空間の1つの領域だけを規定しうるにすぎないが、それにもかかわらず、その命題を通して論理空間全体がすでに与えられているのでなければならない。（さもないと、命題を否定したり論理和や論理積などを作ったりするたびに新たな要素が一新たな座標軸として一導入されねばならないことになってしまうだろう。）（像を取り巻く論理的足場は論理空間にあまねく行き渡っている。そうして命題は論理空間全体へと手を伸ばす。）
- 3.5 使用された一すなわち思考された一命題記号が、思考である。
- 4 思考とは有意味な命題である。

- 4.001 命題の総体が言語である。
- 4.01 命題は現実の像である。
- 4.012 明らかにわれわれは「aRb」という形式の命題を像として受け止めている。ここにおいて記号は明らかにそれが表すものの似姿である。
- 4.014 レコード盤、楽曲の思考、楽譜、音波、これらは互いに、言語と世界の間で成立する内的な写像関係にある。それらすべてに論理的構造が共通している。
- 4.022 命題はその意味 Sinn を示す。命題は、それが真ならば、事実がどのようなものであるかを示す。そうして事実がかくかくであるということ語る。
- 4.023 命題は、あとはイエスかノーかを確かめればよいということまで、現実を確定しているものでなければならない。そのためには、現実が命題によって完全に記述されていなければならない。命題は、論理的足場を頼りに世界を構築する。そしてそれゆえ、その命題において、それが真であるならばそこから論理的に何が言えるのかもまた、すべて見て取ることができる。
- 4.024 命題を理解するとは、それが真であるとすれば事実がどうであるかを知ることである。その命題の構成要素が理解されるとき、命題は理解される。
- 4.0312 命題の可能性は記号が対象の代わりをするという原理に基づいている。「論理定項」[$\sim \cdot \vee \cdot \wedge \cdot \supset$ など] はなんらかの対象の代わりをするものではない。事実の論理は記号では表しえない。これが私の根本思想である。
- 4.04 命題においては、それが描写する状況と正確に同じだけのことが区別されるのでなければならない。両者は同じだけの論理的（数学的）多様性をもっていなければならない。
- 4.06 命題は現実の像であることによるのみ、真か偽でありうる。
- 4.0621 記号「p」と「 $\sim p$ 」が同じことを語りうるということは重要である。というのも、そのことは記号「 \sim 」が現実における何物にも対応していないことを示しているからである。命題「p」と「 $\sim p$ 」は逆方向の意味 Sinn をもつが、しかし、それらには同一の現実が対応する。
- 4.0641 否定命題は、自らの論理的領域を、否定される命題の論理敵領域の外側にあるものと記述する。こうして否定命題は、否定される命題の論理領域を利用して、その論理的領域を規定するのである。
- 4.1 命題は事態の成立・不成立を描写する。
- 4.114 哲学は思考可能なものを境界づけ、それによって思考不可能なものを境界づけねばならない。
- 4.115 哲学は、語りうるものを明晰に描写することによって、語りえぬものを指し示そうとするだろう。
- 4.116 およそ考えられうることはすべて明晰に考えられうる。言い表しうることはすべて明晰に言い表しうる。
- 4.12 命題は現実をすべて描写しうる。しかし、現実を描写するために命題が現実と共有せねばならないもの—論理形式—を描写することはできない。論理形式を描写しうるには、われわれはその命題とともに論理の外側に、すなわち世界の外側に、立ちうるものでなければならない。

真理操作

- 4.21 もっとも単純な命題、すなわち要素命題は、1つの事態の成立を主張する。
- 4.211 要素命題の特徴は、いかなる要素命題もそれと両立不可能ではないことにある。
- 4.22 要素命題は名からなる。それは名の連関、名の連鎖である。
- 4.221 命題を分析していけば、その結果は明らかに、名が直接結合してできた要素命題でなければならない。要素命題が存在するからこそ、いかにして命題と命題の結合が為されるのかも問題になるのである。
- 4.23 名はただ要素命題という文脈においてのみ、文脈に現れる。

- 4.26 すべての真な要素命題の列挙によって、世界は完全に記述される。世界は、すべての要素命題を挙げ、さらにどれが真でどれが偽かを付け加えれば、完全に記述される。
- 4.27 n個の事態の成立・不成立に関して $K_n = 2^n$ 通りの可能性がある。どの事態の組合せも成り立ちうるが、ある組合せが成り立っているときには、他の組合せは成り立っていない。
- 4.28 これらの組合せに対応して、要素命題の真—および偽—の可能性が同じ数だけある。
- 4.3 要素命題の真理可能性は、事態の成立・不成立の可能性を意味している。
- 4.31 真理可能性は次のような図表で表せる。

p	真	偽
---	---	---

q	真	真	偽	偽
p	真	偽	真	偽

r	真	真	真	真	偽	偽	偽
q	真	真	偽	偽	真	真	偽
p	真	偽	真	偽	真	偽	真

- 4.4 命題は、要素命題の真理可能性との一致・不一致を表現したものにはかならない。
- 4.41 要素命題の真理可能性が命題の真偽の条件である。
- 4.42 ある命題が n 個の要素命題の真理可能性のどれと一致しどれと一致しないかに関しては $L_n = 2^{(2^n)}$ 通りの可能性がある。
- 4.431 要素命題の真理可能性との一致および不一致の表現が、それぞれその命題の真理条件を表している。
- 4.442 たとえば次は命題記号である。

	真	真		真
q	真	真	偽	偽
p	真	偽	真	偽

あるいはより明示的にこう書かれる。「(真真偽真) (p, q)」

- 4.45 n 個の要素命題に対して可能な真理条件は $L_n = 2^{(2^n)}$ 組ある。
- 4.46 真理条件の可能な組の中に、2つの極端な場合がある。第1の場合、その命題はトートロジーと呼ばれ、第2の場合には矛盾と呼ばれる。
- 4.461 命題はそれが語っていることを示しているが、トートロジーと矛盾は、それが何も語らないことを示している。トートロジーと矛盾は無意味 sinnlos である。
- 4.462 トートロジーと矛盾は現実に対応する像ではない。
- 4.5 ひとが予見不可能な（すなわち構成不可能な）形式をもつ命題など存在しえない。このことは、一般的な命題形式が存在することを示している。「事実がかくかくである」—これが命題の一般形式である。
- 4.51 私にすべての要素命題が与えられたと仮定する。そのとき、残された問題は単純にこうである。この要素命題から私はいかなる命題を構成しうるか。そしてこれが全命題であり、命題はこのようにして限界づけられる。
- 5 命題は要素命題の真理関数である。
- 5.101 任意の個数の要素命題に対して、その真理関数は次のような図表で書くことができる。
 (真真真真) (p, q) トートロジー— ($p \supset p, q \supset q$)
 (偽真真真) (p, q) — ($\sim (p, q)$)
 (真偽真真) (p, q) — ($q \supset p$)
 (真真偽真) (p, q) — ($p \supset q$)
 (真真真偽) (p, q) — ($p \vee q$)
 (偽偽真真) (p, q) — ($\sim q$)
 (偽真偽真) (p, q) — ($\sim p$)

(偽真真偽) (p, q) — (p. ~ q : V : q. ~ p)
 (真偽偽真) (p, q) — (p ≡ q)
 (真偽真偽) (p, q) — p
 (真真偽偽) (p, q) — q
 (偽偽偽真) (p, q) — (~ p. ~ q)
 (偽偽真偽) (p, q) — (p. ~ q)
 (偽真偽偽) (p, q) — (q. ~ p)
 (真偽偽偽) (p, q) — (q. p)
 (偽偽偽偽) (p, q) 矛盾 — (p. ~ p. q. ~ q)

入力される真偽項のうち、とくにその命題を真にする真理可能性を、その命題の真理根拠と呼ぶ。

5.121 「pがqから帰結する」とは、一方の真理根拠が他方の真理根拠に含まれるということにほかならない。

5.132 pがqから帰結する、そのとき私はqからpを推論することができる。「pがqから導出される」とは、つまりそういうことである。

5.133 すべての導出はアプリアリに成立している。

5.234 要素命題の真理関数は、諸要素命題を基底とする操作の結果である。(私はこの操作を真理操作と呼ぶ。)

5.2341 pの真理関数の意味 Sinn はpの意味 Sinn の関数である。否定、論理和、論理積、等々は操作である。

5.25 操作が施されているということは、その命題の意味を特徴づけるものではない。つまり操作は何も語らない。操作の結果だけが語るのであり、それは操作の基底に依存している。

5.3 すべての命題は要素命題に真理操作を施した結果である。真理操作とは、要素命題から真理関数を作る方法である。

5.32 すべての真理関数は、要素命題に対して真理操作を有限回くりかえし適用することによって得られる。

独我論

5.5 いかなる真理関数も、要素命題に次の操作を反復適用した結果である。

(- - - - 真) (ξ, ……) これは右のカッコ内のすべての命題を否定したものであり、私はこの操作をこれら諸命題の否定と呼ぶ。

5.54 一般的な命題形式では、命題はただ真理操作の基底としてのみ、他の命題中に現れる。

5.541 一見したところ、ある命題はこれとは別の仕方でも他の命題中に現れうるかのように思われる。とくに、「Aはpであると信じている」や「Aはpと考える」といった心理に関わる命題においてそのように思われる。

5.542 しかし、明らかに「Aはpと信じている」「Aはpと考える」「Aはpと語る」は、もとをたどれば「p」はpと語る」という形式となる。そしてここで問題となるのは、事実と対象の対応関係ではなく、対象と対象の対応関係を通して与えられる事実相互の対応関係なのである。

5.5561 経験的実在は対象の総体によって限界づけられる。限界は再び要素命題の総体において示される。

5.6 私の言語の限界が私の世界の限界を意味する。

5.61 論理は世界を満たす。世界の限界は論理の限界でもある。思考しえぬことをわれわれは思考することはできない。それゆえ、思考しえぬことをわれわれは語ることもできない。

5.62 この見解が、独我論はどの程度正しいのかという問いに答える鍵となる。すなわち、独我論の言わんとするところはまったく正しい。ただ、それは語られえず、示されているのである。世界が私の世界であることは、この言語（私が理解する唯一の言語）の限界が私の世界の限界を意味することに示されている

5.621 世界と生とはひとつである。

5.63 私は私の世界である。

5・631 思考し表象する主体は存在しない。「私が見出した世界」という本を私が書くとすれば、そこでは私の身体についても報告が為され、また、どの部分が私の意志に従いどの部分が従わないか等が語られねばならないだろう。これはすなわち主体を孤立させる方法、というよりむしろある重要な意味において主体が存在しないことを示す方法である。つまり、この本の中で論じることのできない唯一のもの、それが主体なのである。

5.632 主体は世界に属さない。それは世界の限界である。

操作と形式

6 真理関数の一般形式はこうである。[p, ξ, N(ξ)] これは命題の一般形式である。

6.001 これが語っていることは、すなわち、いかなる命題も要素命題に操作 N(ξ)をくりかえし適用した結果である、ということにほかならない。

6.126 論理命題の証明とは、すなわち、一定の操作をくりかえし適用することによって、当の論理命題を別の論理命題から作成することにほかならず、しかもその操作は、最初のトートロジーから次々にトートロジーを作り出していくものにほかならない。

6.13 論理学は学説ではなく、世界の鏡像である。論理は超越論的である。

6.3 論理学の探求とは、すべての法則性の探求にほかならない。そして論理学の外では、いっさいが偶然的なのである。

6.31 いわゆる帰納法則は、およそ論理法則ではありえない。というのも、それは明らかに有意味な命題だからである。それゆえまた、それはアプリアリな法則でもありえない。

倫理

6.41 世界の意義 Sinn は世界の外になければならない。世界の中ではすべてはあるようにあり、すべては起こるように起こる。世界の中には価値は存在しない。

6.42 それゆえ倫理学の命題も存在しえない。命題はより高い次元をまったく表現できない。

6.421 倫理が言い表しえぬものであることは明らかである。倫理は超越論的である。(倫理と美はひとつである。)

謎の解消

6.5 答えが言い表しえないならば、問いを言い表すことはできない。謎は存在しない。

6.51 問われえないものを疑おうとする以上、懐疑論は論駁不可能なのではなく、あからさまにナンセンス unsinn なのである。すなわち、問いが成り立つところでのみ、疑いも成り立ちうるのであり、答えが成り立つところでのみ、問いが成り立つ。そして答えが成り立つのは、ただ、何事かが語られうるところでしかない。

6.522 だがもちろん言い表しえぬものは存在する。それは示される。それは神秘である。

7 語りえぬものについては、沈黙せねばならない。